
敷島の青い車その 5

谷津矢車

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

敷島の青い車その5

【Zコード】

Z3004E

【作者名】

谷津矢車

【あらすじ】

“某自動車メーカーの若き俊英・敷島は、大和部長のいる部長室に駆け込んだ。はは～ん、敷島君、また新しい車の動力を開発しましたね？今回は成功するかな？”といったお話の、まさかの第五弾です。

もういい加減、こういう使いまわしの文章を書くのはどうかと思うんだけどな、と半ば自己批判気味に言い訳しつつ書くけれど、某自動車メーカーの開発部の若き俊英・敷島は、最早お約束どばかりに大和部長のいる開発部長室に駆け込んだ。

「大和部長！やりました！」

「ん？！は！？」

突然入ってきた敷島に、大和部長は面食らったようだった。敷島がドアを開け放つた瞬間、何か長い棒のようなものを振り回していだ大和部長だつたけれど、その棒を、まるで〇点の答案を隠す子供のように、あわてて背中に隠す大和部長なのだつた。

「ふ、部長？何をしておいでだつたんです？」

「い、いや、なんでもない」

明らかにバツが悪そうな大和部長。敷島と田をあわさないように、視線を逸らしている。

怪しい。そう思われたのは、何も読者の皆様だけではあるまい。当然、敷島もいぶかしんだ。

「一体、何をお隠しで？」

「いこい、コラ！余計な詮索を！」

そんな大和部長の言い分を無視して、敷島は大和部長の背中を覗き込んだ。当然、背中には大和部長が隠していたものがあつたわけだ。

「部長、どうして」敷島は、背中を眺めながら無邪気に訊いた。「ゴルフクラブを？」

そう、部長が持つっていたのは、ゴルフクラブだつたのだ。

大和部長は、おたおたと言い訳しだした。

「い、いや、今週の日曜日、接待ゴルフがあつてな、その練習を…」

普通の神経の持ち主だったら、「勤務時間帯に何をやつてるんじやい、仕事せい！」と思うところだろうけれど、敷島は別のところに興味を持つたらしい。敷島は訊いた。

「あのう、今更ですけど、大和部長は開発部の部長ですよね？」

「そうだが」

「じゃあ何で、接待ゴルフを？」

開発部、というのは、新しい技術の開発を行なう部署である。内向きの業務をしている総務部と比べればまだ外部の人間と付き合う機会があるものの、けれど営業などと比べればはるかに外部の人間との接触は少ない。何が言いたいのか、といふと、「接待」というものは、外部との接触の多い営業部の専売特許だ、ということだ。それに、他の会社はどうか知らないが、敷島が勤めている会社の開発部には、誰かを接待をする、という慣習が無かつた。

とにかく、大和部長が「ゴルフクラブを握っている、それが敷島には不思議で見慣れない光景だつたのだ。

すると、大和部長はため息を吐いて応じた。

「ああ、それは、開発部がもう一つ出来たせいだ」

そう、最近、“第一開発部”なる部署が出来たのである。

詳しい事情は「敷島の青い車その4」に譲る（と宣伝を打つておく）が、どうやら会社の上層部は、今の開発部に不満を持っているらしい、そこで、もう一つ開発部を作りたがっているらしかった。そして、今年の春、開発部を二つに分割する形で、第一開発部が成立了のである。

大和部長はため息をまた吐いた。

「元々、無理があつたんだ。開発部を二つなんて。しかも、予算を増やすでもなく、な。結局ワシたち第一開発部と第一開発部が、少ない予算を奪い合つ構図になつてゐるわけだ」

「はあ……」

敷島は、頭を搔きながら首を傾げてゐる。敷島は、研究バカの気のある男なので、そういう会社のパワーバランスとか、予算の分配

とかいつた問題に、興味が向かないようだし、そもそも理解も出来ないらしい。

「で、しかも、ワシ達第一開発部の方が、明らかにジリ貧だな」

大和部長が言うには、第一開発部のほうには、社内において影響力のある人間が多いらしい。だから、予算も取り易いのだ、と口を辛く批判した。それを、敷島はつまらなそうに訊いていたけれど、次の大和部長の言葉に、ようやく反応を見せた。

「しかも、第二開発部の連中、リッターあたり30kmも走るエンジンを開発したらしい」

「ななな、なんですって！？」

研究バカの敷島、さすがに技術畠の話には食いつきが良いのだ。
「しかも、だ」大和部長は興味無さそうに続けた。「ハイブリッドエンジンじゃないそうだ。つまり、エンジン効率だけでこれだけの成果を出している、ということだ。となると、向こうに予算が相当流れてしまうだろう。そこで、ワシのこのゴルフクラブの出番だ」
大和部長は、まるで勇者が伝説の剣をかざすような要領で、ゴルフクラブをかざした。

「情けない話だが、我々第一開発部は、そのエンジンに対抗するだけの新開発はない。かといって、ただ手をこまねいているだけというのも癪じやないか。そこで、会社の重役連中に、やりたくもない“接待”をかけているのだ。予算をふんだくるためにな」

「…あのう、部長？」

遠慮気味に、敷島が手を挙げた。

「なんだ？」

「どうして部長は、そんなまどろっこしい手段をとられるんです？
こちらも、対抗できるだけの開発を行つて予算をがっぽり取ればいいじゃないですか」

敷島の割にはつきりとした、よどみない口調に大和は驚きを覚えた。

「あのなあ…」

「実は」敷島は言った。「またしても、新しい動力を開発したんですね」

「な、なんだと？」

「こんな場面で、嘘はつきませんよ。ちなみに」敷島は胸を張った。

「自信は、ものすごくあります」

「訊くが」大和は訝しそうに敷島を見た。「リッターあたり30km以上にパンチのある動力なんだろうな?で無いと、予算を第一開発部に持つて行かれてしまうぞ?」

「ご安心ください」

あまりにきつぱりとした口調に、大和部長は唸った。そして、持っていたゴルフクラブを机に立てかけて、敷島の前に立ち、敷島に言った。

「よし、じゃあ、君の開発した動力とやら、見に行くか」「え、じゃあ……」

目を輝かせる敷島に、大和は釘を刺すのを忘れなかつた。

「勘違いするな。別に、ワシは君の作った新動力に期待しているわけではない。ただ単に……」

「ただ単に?」

「気の進まないゴルフ、しかも自分よりはるかに年下の重役どもにゴマをする練習に精を出すよりは、部下の仕事ぶりを叱責するほうがはるかにマシだ、ってことだ」

大和部長の立てかけて置いたゴルフクラブが、コトーンと音を立てて倒れた。

試験滑走場。

いつものように、その真ん中に、青い車が一台置かれていた。

その前に立つた大和は、いつものように質問した。

「で、今回は、どういう感情をエネルギーにしたエンジンを積んでいるんだね」

毎回、敷島は妙ちくりんな動力を開発するのだけれど、毎回決ま

つて「人の感情からエネルギーを取り出す」というエネルギーの取り出し方である、という点は一致している。原理は敷島にしかわからない、という事実と相まって、他の研究者から言わせれば、「それってペテンか何かじゃないの?」と聞きたくなってしまうようなエネルギーの取り出し方をしている。究極のクリーンエネルギーである反面、そのエネルギーを取り出す感情の特徴が、エンジンの回り方に反映されてしまうのが欠点と言えば欠点なのだ。そのせいで、バックしかしない車やら止まらない車やらに乗せられ、これまで大和部長は散々な目に遭っているのだ(詳しくは、「敷島の青い車」のバックナンバーを参照の事!と宣伝を打つておく…って、今回一度目ですね)。

けれど、大和部長は、これまでの“経験”があるから、もはやまるで疑っていないのだ。

「はい、今回は、“向上心”で動きます

「向上心、とな?」

「はい」敷島は、青い車のボンネットを叩きながら続けた。「もっと良くなりたい、もっと良くしたい。もっと改善したい。もっと切磋琢磨したい。そういう気持ちですよ。そういう気持ちの周りに生じるエネルギーを取り出して、エンジンを回しています」

「ふん、なるほど」

二人は、青い車に乗り込んだ。今回も、大和部長が運転席に乗り込んだ。

「向上心、か。むしろその言葉は、君にこよお似合いだと思うんだがな」

と、ハンドルを握りながらぶつぶつと文句を垂れる大和部長に、敷島は反論した。

「実は、もう僕は試乗してみてるんです。で、その結果が上々でしたので…。むしろ、実用化可能なレベルでした」

「道理で自信があるわけだ」

「はい、あとは、向上心の無い人でも動くのか、そこが関心事なん

です」

「ほう、つまりは」大和部長は言った。「ワシのことを、『向上心のない人』と思っている、ということだな?」

「あ、いや、そんなつもりは…」

明らかに、あちゃー、という顔を見せる敷島に、大和部長は言った。

「ふふん、これでも、向上心は人並みにはあるつもりだぞ?」

「ああ!」敷島は合いの手を打った。「勤務時間帯に接待ゴルフの練習をなさるくらいですからね。ゴルフに対する向上心はお強いのでしょうけど」

果たして、この言葉は皮肉なのか、それともただの天然なのかは、大和部長には今ひとつ判別がつかなかつた。

それはともかく置いといて、大和部長はヘッジギアをかぶつた。

「で、何をイメージすればいい?」

「今、改善したいこと、とか、目標とかですかね」

「ならば、予算の獲得、だな」

大和は自分の言葉通り、予算の獲得のことを思い浮かべた。ブウン。

そんな音と共に、青い車は動き出した。最初はゆっくり。けれど、時間の経過と共に、車の動きも少しづつスマーズになつていつた。

「おお!」

景色が後ろに流れしていく感覚に、まるで子供のよつにはしゃぐ大和部長。

「どうですか?」

既にスピードをしつかり上げている、つまり、普通の車と比しても何の問題もない、青い車の助手席で、大和部長に訊く敷島。大和部長はその質問に笑顔で応じた。

「うん、これなら、問題なかろ」

う、と言おうとした瞬間、不意打ちに、青い車に波乱が訪れた。

二人の体は、前に投げ出されそうになつて、シートベルトに食い

込まれる羽目になつた。こうこう風に、体に慣性がかかるときとうのは、急ブレーキでも踏んだときだ。このとき、青い車を外から観測している人はいなかつたのだが、外側からはまさに急ブレーキを踏んで急停車した青い車の姿を観測した事だらう。

「な、なんで急ブレーキなんか踏むんですかー舌噛みそつになつちやいましたよ！」

「……いや」大和部長も、首を傾げた。「ワシだって、何もしていなide」

「え？ そんなバカな。……とにかく部長、もう一度、走り出しましょう！」

「あ、ああ……」

今度も、結果は一緒だつた。

あるといひまでは心地よく加速するのに、あるといひで、まるで息切れしてしまつたかのようにブレーキがかかる。そして、また動き出しへは止まり、動き出しへは止まり、と、一連の動きを見せるのだ。

「なんだか、酔っ払やいそうですね」

と、ようやくこの車のストップ＆ダッシュに慣れてきた敷島は呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3004e/>

敷島の青い車その5

2010年10月8日15時10分発行